

作業療法総論と当院での 役割と実際

尾道市民病院 リハビリテーション科 作業療法士 山崎 拓也

2025. 9. 18

プロフィール

- 広島県立保健福祉大学（現県立広島大学）
保健福祉学部作業療法学科卒業
- 柳井病院勤務（精神科）
- 尾道市立市民病院勤務
- 出身：長崎県諫早市



作業療法の歴史

作業療法の始まり

古代ギリシャ：「作業」が心身の治療に役立つという考え方が存在

18世紀：フランスの精神科医フィリップ・ピネルが「道徳療法」を提唱。精神疾患患者に作業活動を取り入れることで症状が改善することを示す

1917年：米国で作業療法士協会（NSPOT）が設立

日本の作業療法の歴史

- 1 9 2 5 年：東京都立松沢病院が日本で初めて精神科における作業療法を導入
- 1 9 6 3 年：日本初の作業療法士養成学校が開校
- 1 9 6 5 年：「理学療法士法及び作業療法士法」制定
- 1 9 6 5 年：日本作業療法士協会が設立

作業療法の定義（1985年）

「作業療法」とは、身体又は精神に障害のある者に対し、主としてその応用的動作能力又は社会的適応能力の回復を図るため、手芸、工作その他の作業を行なわせることをいう。

理学療法士及び作業療法士法第2条第2項

作業療法の定義（2018年）

作業療法は、人々の健康と幸福を促進するために、医療、保健、福祉、教育、職業などの領域で行われる、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である。



作業とは何か

作業とは、個人にとって意味があり、目的を持って行う活動全般。

例：食事・入浴などのADL、買い物・家事などのIADL、趣味・学習・余暇・就労・社会活動など。

簡潔に言うと

作業療法では、さきほどの「作業」を治療手段として用いたり、その「作業」自体ができるようになることを目標としたりして、個々の能力の回復、維持、開発を促します。



作業活動を用いた訓練



手工芸活動

革細工・籐細工・編み物・貼り絵など



芸術活動

絵画・書道・貼り絵・生け花など



遊びやレクリエーション活動

ゲーム・スポーツ・園芸・将棋など

日常生活動作 (ADL)訓練・手段的日常生活動作 (IADL)訓練



ADL：食事、入浴、排泄、更衣などの基本的な身辺動作の訓練を行ないます。



IADL：買い物、調理、掃除、金銭管理、交通機関の利用などのより複雑な日常生活活動の訓練を行ないます。

機能訓練



感覚・運動機能訓練：関節可動域訓練・筋力増強
訓練・筋再教育訓練・巧緻
性訓練など



高次脳機能訓練：注意力・記憶力・遂行機
能・認知機能などの改善を
図る訓練を実施。

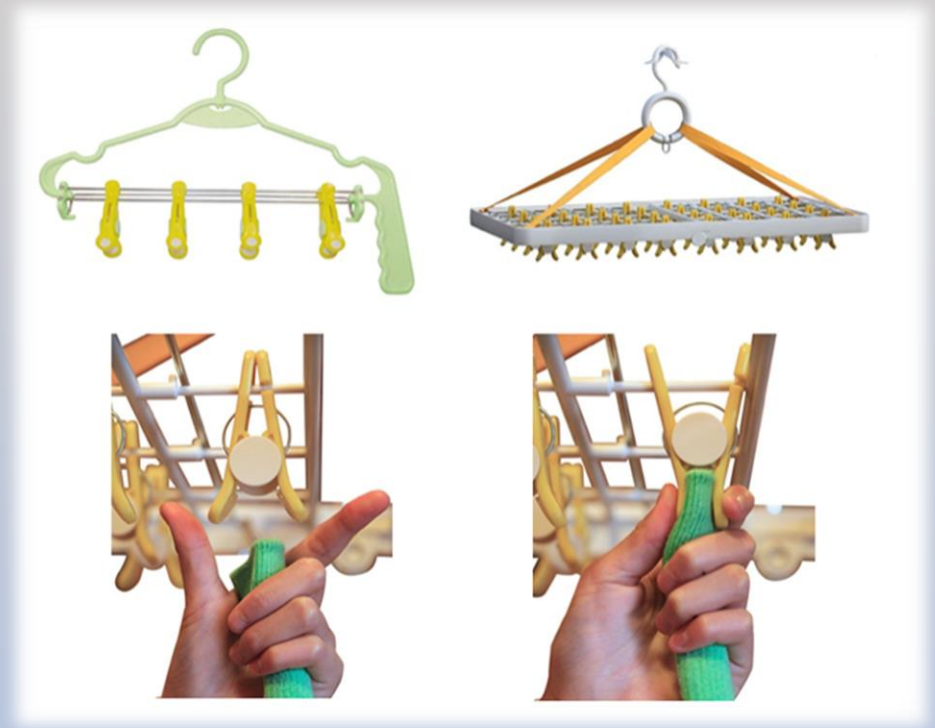


ハンドセラピー：上肢や手指に特化した治
療で、細かい動きや感覚
の改善を図る訓練を実施。

その他

- 心理教育・認知行動療法
- 社会参加支援
- 環境調整（自助具・福祉用具・住環境・人の支援）



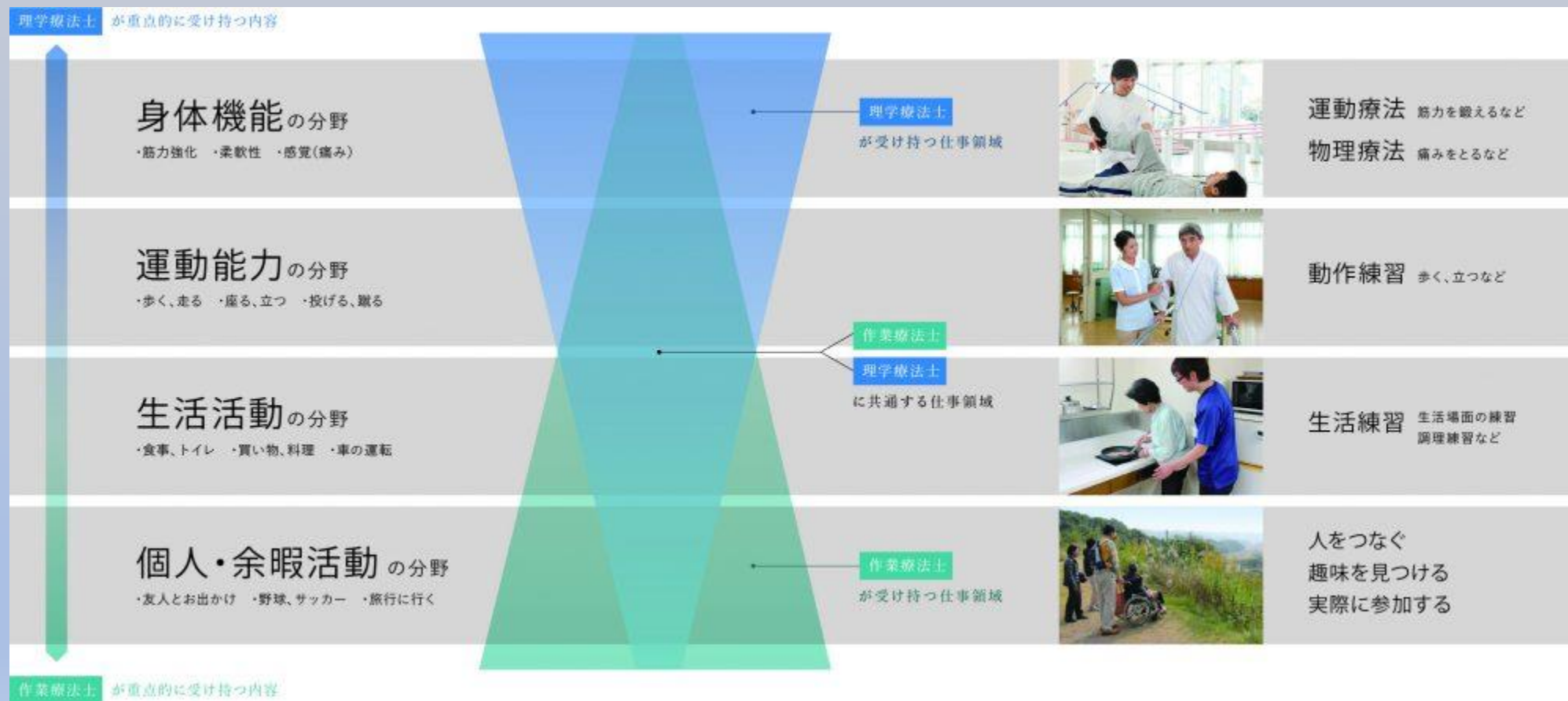


対象者と支援領域

- 身体障害：脳卒中、整形外科疾患、難病など
- 精神障害：うつ病、統合失調症、発達障害など
- 高齢者：認知症、老年症候群など
- 発達障害（小児）：ASD、ADHD、LDなど

※年齢・疾患を問わず「生活に困りごとのあるすべての人」が対象です。

理学療法と作業療法の違い



障害者スポーツ

特定の障害者を対象に創出されたもの

ボッチャ（重度脳性麻痺）、サウンドテーブルテニス（視覚障害）、ゴールボール（視覚障害）、グランドソフトボール（視覚障害）、ハンドサッカー（重度肢体不自由）等

既存のスポーツのルールや道具等を障害者向けに適合させた

車椅子バスケットボール、車椅子テニス、脳性麻痺者7人制サッカー、視覚障害者5人制サッカー、電動車椅子サッカー、フライングディスク、シッティングバレーボール（下肢麻痺）、風船バレー等

事例①：身体障害領域

- 事例：脳梗塞後、右不全麻痺となった70歳代の患者
- 目標：トイレ動作の獲得
- 介入
 - 身体機能の評価→ 関節可動域・座位・立位など
 - 認知機能の評価→ 高次脳機能（視空間無視・失行・失認など）
 - 実際に即した環境設定→ リハ室内のトイレ練習
→ 病棟内でのトイレ練習
 - 他職種との現状の把握・連携→ 病棟でのADL拡大



事例②：身体障害領域

- 事例：脳梗塞後、右片麻痺となった70歳男性
- 目標：病室内での早期食事動作の獲得
- 介入：
 - 身体機能の評価→ 座位姿勢・上肢・手指機能の評価
 - 嚥下機能評価→STからの情報共有
 - 認知機能の評価→高次脳機能（視空間無視・注意・失行など）
 - 自助具の導入 or 健側→ 模擬的な練習を実施
 - 他職種との現状の把握・連携→病棟でのADLの拡大



事例③：精神・発達領域

- 事例1：統合失調症の30代男性／就労移行支援を希望
- 介入：日中活動習慣の再構築、社会的スキル訓練（SST）
- 事例2：ASD傾向の小学生／集団遊びが苦手
- 介入：感覚統合アプローチ、遊びの場面での関わり支援、保護者・教員との連携



当院での役割（急性期の作業療法）

- 急性期リハビリテーションでは、脳卒中、骨折といった急な病気やけがの治療直後、あるいは治療と並行して行われます。急性期リハビリテーションでは、「**早い段階でリハビリテーションを行い、できるだけ元の状態に戻すこと**」や、「**早期退院を目指すこと**」が主な目的となりますが、あわせて「**安静状態によって引き起こされる新たな機能低下（廃用症候群）を防ぐ**」という目的も担っています。

当院での実際

- 総合病院のため、様々な診療科（整形外科・脳外科・内科・泌尿器科・皮膚科・血管外科・消化器科・循環器内科）からリハビリの依頼が来ます。
- 整形疾患（腱板断裂・上肢・手指の骨折・変形性肩関節症・屈筋腱断裂・伸筋腱断裂）の患者さんに関わらせていただくことが多いです。
- 超高齢化が進行しており、ADL動作の獲得を目的に作業療法を行なうよりは、廃用予防を目的に作業療法を行なっている患者さんが増えてきている。

ご清聴ありがとうございました。

